異星人な彼と彼女

ryouka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異星人な彼と彼女

【Ｎコード】
Ｎ５３０７Ｅ

【作者名】
ｒｙｏｕｋａ

【あらすじ】
高校生の白井優と羽田恵那、そして？が織りなす恋愛模様。ＳＦチックな恋愛物です。

第1話　二人の出会い

私、羽田恵那の好きな人は宇宙人です。
なんて言うと頭の痛い女だと思うだろうけど、彼自身がそう言っているので、私はその事実を愛を込めて約一年と半年保留中だ。
白井優は宇宙人だ。なんて意味不明な噂は、入学してから二ヶ月後、私に届いた。
私は友達四人で行った中間テストの総合点争いに負けてしまい、隣のクラスの白井くんにその事実を確かめにいかなくてはならないという重要な任務と言う名の罰ゲームを与えられた。
ちなみにそのとき初めて彼の存在を知った。
あまり行き慣れていない隣の教室に、私は遠慮がちに腰を屈めながら入り、教卓で白井と言う名を確認して、その窓際の机に向かった。
休み時間だったから席に着いていないことを祈ったけど祈りは通じず、その机には寝癖まじりのワリと顔の整った男子が無表情で、話しかけてくるな、という雰囲気を醸し出しながら座っていた。
このまま引き返そうかと考えたけれど任務未達成で戻る方が、何をされるかわからないので怖い。私は思い切って白井くんに声をかけた。
「初めまして、えーと、白井くんですか？」
「そうだよ」
無愛想な声を発して、私の方に顔を向けず、窓から見える国道に向かって言った。
「単刀直入に訊くけど白井くんは宇宙人ですか？」
「宇宙人じゃない」
だよね、あんなしょうもない噂、誰が考えたんだろう？　白井くんは姿形がめちゃくちゃ人間なのに宇宙人な訳がないよ。
「異星人だ」

「はい？」
「宇宙人だとこの星に住む人類も宇宙人と言える。だから俺は違う星から来た異星人だ」
白井くんはそう言って私の眼を見つめた。
目が合った瞬間、私はその場から逃げるように立ち去った。
やっぱりだ。噂通り白井くんは不思議だ。そしてあの異様な雰囲気。私の好きなタイプだ。無論、人目惚れです。
その日から私は白井くんを意識し続け、誰にも言わないでその気持ちを暖めてきた。今考えてもやっぱり不得要領だ。何故私は白井くんを好きになったのだろう？　ただ一度会話しただけなのに。もしかしてこれが宇宙人の不思議パワーなのかもしれない。
「不思議なのは恵那でしょ？　白井なんてよくわからない奴好きになって。中学のときもそんなだったでしょ。だからそれなりに顔は良くても、生まれて十七年彼氏も出来ないのよ」
と厳しいことを言うのは豊里織恵、通称おりちゃん。
おりちゃんとは中学が同じで仲が良く、退屈な授業が終わった放課後、家にも帰らず机を囲んでよく雑談している。そして今日。白井くんへの恋心を、気持ちが芽生えてから二度目の冬を迎えてやっと友達に伝える決心がついた。何でこんなにも先延ばしになったかというと白井くんが余りにも不思議かつ電波な人だからだ。
それにしても今日のおりちゃんはいつにも増して言葉の棘に磨きがかかっている。ということは。
「また彼氏とケンカしたの？」
「そうよ、文句ある？　あたしは悪くないのよ。あいつ年上で社会人だからって調子のって。今日はイブよ、クリスマスイブ。約束してたのに。疲れたから今日は寝させてだって。ふざけてるでしょ？　私が怒る理由もわかるでしょ！」
おりちゃんが機嫌の悪いときは八割方、恋人とのケンカだと決まっている。そんな状態のおりちゃんに話しかけると決まってこうグチを聞かされるはめになるので、私はいつも聞いたフリで済ませる。

毎週グチを訊いていれば自然とこうなってくるのは当たり前でしょ。
「恵那も男できたらわかるって、あたしの気持ち。もう白井なんてほっといて他当たりなよ。何ならあたしが紹介しようか？　せっかくのイブで、しかも明日から冬休みなのに独り身なんて切ないでしょ？」
「いいよ私は慣れてるし。でも今日はおりちゃんに白井くんを好きだって伝えられてよかった。なんかすっきりしたよ」
「気付いてたけどね。恵那が白井を好きだってことくらい」
「どういうこと？」
「授業中も隙があれば、食堂でも隙があれば、登下校中も隙があったら白井を見てるでしょ？　それに恵那が変な人を好きになるのは中学校から有名だし」
　気付かない間にそんなに見てたんだ。自分でもビックリだよ。でも聞き捨てならない言葉が含まれている。
「変な人ってどういうことよ！」
「中学の頃好きだった大北ってゲームオタクでしょ、それに相川だってアニメオタクでしょ。高校に入ったら入ったで自称宇宙人だなんてあんたイタイよ」
「うるさいな、好きな人がたまたまそうなだけだからいいでしょ。それにゲームとかアニメが好きな人のどこがいけないっていうのよ」
「それは何ていうか雰囲気が……」
「じゃ、あたしはそういう雰囲気が好きなの」
「それって十分イタいんだけど……わかったわかった、あたしが悪かったよ。じゃあ聞くけどその白井くんと同じクラスなのにどうして話しかけないのよ？」
　一年生の頃、隣のクラスだった白井くんは、私の週一回の寺参りによって、二年生で同じクラスになった。お参りしていた寺が商売繁盛のご利益がある、と知ったときはお参りをやめようかと思ったけど続けてよかったよ。寺によってご利益が変わるとか言ってるけど案外関係ないかもね。無理して遠くの恋愛成就の寺に行かなくて

よかった。
　けど、私はそんな苦労してまで同じクラスになったのに、指折り数えるほどしか彼と会話をしていない。話さない理由なんてあるのだろうか？　ただ勇気が出ないだけと思う。だって自称宇宙人だし。
「本当に宇宙人だったら怖くない？」
　おりちゃんは溜め息をついてから微笑んだ。
「宇宙人なわけないでしょ、ばーか。もういいや、みんな誘ってカラオケ行こ。せっかく学校昼で終わるしクリスマスイブだしさ、恵那どうせ暇でしょ？」
「残念でした。今日は行く所があるので」
　私はカバンを持って席から離れ、帰る用意をしている、クラスメイトの寺内くんに近づいた。寺内くんはこの学校で唯一白井くんと行動を共にしている変わった人だ。
　背後からおりちゃんの声が聞こえる。
「恵那、もしかして本気で白井のこと好きなの？」
　私は首だけおりちゃんの方に向けて睨みつけた。
「言いふらしちゃダメ。二人だけの秘密だから」
「秘密にしなくてもみんな気付いてるわよ、寺内だってそうだろ？」
　そんなわけないじゃない。おりちゃんがわかったのは中学からの付き合いがあってからだこそだよ。みんなが気付くような態度を取った覚えなんてないし。
「恵那ちゃんが優のこと？　それに気付かないような鈍い奴なんていないでしょ」
「マジで？」
　私、そんなわかりやすい態度取ってたの？　だとしたら今まで胸の奥でしまい込んでいた恋心はどうなるの？　やばい、クラスのみんなが知っている事実に気付いた途端登校拒否したくなってきた。まさに人生最大の恥だよ。
　よかった、明日から冬休みで。
「そ、そんなことより寺内くん？　白井くんはいつもの場所にいる

の？」
「おっ？　いるよ。一緒に来る？」
「もちろん」
教室から出ようとする私に「あんな奴とつるむよりカラオケ行った方が面白いって」なんて声が聞こえてくるけど聞こえないフリだ。確かにおりちゃん達とカラオケに行った方がそれなりに楽しい放課後、クリスマスイブを過ごせるだろうけど私はもう決めた。
一年半以上かかったけれど、やっと決心がついた。
白井優と、いや、宇宙人と関わることに。

……

俺は嘘をついている。
けれど、それはあまりにも滑稽で笑えないものなので冗談とも言えない。しかし非現実的過ぎて嘘とも呼べないだろう。
俺は異星人だ。
道化もいいところ。自分で言っておいて鼻で笑ってしまうよ。もしその言葉を鵜呑みにする奴がいたら脳内にビッグバンを起こして赤子の脳内から始めた方が良いだろうな。
きっとクラスの奴らも腹の底では笑っているのだろう。中には変人扱いで蔑んだ眼で見ている奴もいる。まあ、俺でもそうするな。
自分から日常を破綻させる言葉を吐く奴なんてろくな者じゃない。
でもたまに後悔することもある。もし俺が異星人だ、何て言わずに高校生活を続けていれば友達も十人くらいはできたかもしれないし、運動場で汗を流し、マネージャーとの愛に勤しみ青春映画の真似事が出来ていたかもしれない。
けれど今頃そんなことを言っても普通の高校生活なんて出来ないだろうし、そんな普通なことをするつもりもない。

この後悔の先はいつも普通なんて下らない。これが結論だ。
正解だった。異星人だなんて嘘をついて。
おかげで俺はほとんど誰とも関わらずに高校に通っている。
一年の一学期辺りは興味本位で話しかけてくる奴もいたが、それも流行と言うものだろう。二学期からは見事に誰も話しかけてくることはなく、異星人と言うよりは気体くらいの存在感で教室に居座ることが出来た。
そんな俺は放課後、旧図書室で静かに誰にも触れられることなく、熱心に未確認飛行物体について調べている。今では誰も使わない教室だから少しほこりにまみれているが、人にまみれているよりはマシだ。そして異星人の俺が放課後に向かう旧図書室も、今では生徒にその名で呼ばれず『異星人の部屋』と呼ばれるようになった。
「ちょっと恵那ちゃんはここで待っといて。優に用があるから」
扉の向こうで風太の声が聞こえる。
風太とは唯一この学校で異星人としての俺に交流してくる奴だ。
休み時間にしろ、昼食にしろ、風太は何が面白いのか俺につきまとってくる。放課後この旧図書室に足を運ぶこともある。風太は何もせず、ただ俺が持ってきたオカルト雑誌を読むだけだが。
今日もそんな意味のない放課後が始まるのだろう。
「よっ、優。今日は何かいい情報見つかったか？」
いい情報とは未確認飛行物体のことだ。いつだったか忘れたが、俺は風太に旧図書室にいる理由を話した。
「二組の松村って奴から桂木山でＵＦＯらしき物を見たと聞いたから、今日の夜向かうつもりだ。お前も来るか？」
俺は風太に顔を向けず、雑誌を読みながらいつものガセネタを伝えた。
先月も松村は、俺に宇宙人を見たという面白い嘘をついていた。高校生にとって夜は暇そのものなので、俺は風太と目撃場所である港に向かったことがあった。
もちろんそんな生物は見当たらず、いるのはシンナー中毒者かホ

ームレスなど、そういった類の人間ばかりだったがな。
「大事な話しがある」
いつもへらへらしている風太が大事な話しと言うのだから、普通の人間の二倍は大事なことだろう。俺は雑誌から眼を離し、風太を見た。
「俺、受験するから放課後ここに毎日来れなくなる。悪いな」
「別に俺から頼んだわけじゃなくお前が勝手に来るだけだろ？　悪くはない。どちらかというと巻き込んだ俺が悪いのかもしれない」
正直こいつが受験のために放課後を勉強の時間にあてると言う事実に驚いたけれど、大学に進学するなら仕方のないことだろう。
「がんばれよ。それでどこの大学に行くつもりだ？」
「大阪大学。今から勉強してどうにかなるかわからないけどな」
「それはでかい目標だな。お前は記憶力がいいし推測力もある。どうにかなるだろう」
これはほんの気休めだ。風太の学力は良いとは言えないが、一年間必死に勉強すればどうにかなるだろう。日本第三位の大学に入学するくらいなら。
「そう言ってくれるとありがたいよ。それと、俺がいなくなる代わりと言っては何だけど、今日からこの子をお前の相棒とするけどいいか？」
俺はお前を相棒にした覚えはない。まあ、風太が紹介する奴ならそれはそれで少し気になる。
「別に俺は静かにしてくれれば一人でも二人でもかまわない、それ以上は嫌だけど。で、誰だ？　異星人な俺と関わりたいなんて思ってるＵＭＡは？」
「そうだな、今廊下にいるから呼んでくるよ。俺はこれで帰るけどあとはよろしくな」
そう言って風太は俺に怪しげな笑顔を向けて教室を出ると、廊下にいた誰かが入れ替わりで入ってきた。
「どうも、白井くん。こんにちは！」

――誰だ？
「あれ？　白井くんだよね、宇宙人の」
「宇宙人ではなくて異星人だ」
「そうだね、異星人だよね」
……こいつ正気か？　俺は異星人だと言ってるのに何が「そうですね」だ。ニコニコ笑って俺を見つめていないで、もっと疑いのまなざしで見つめろよ。変な奴だな。
「ごめん、顔は見た覚えがある気もするが、名前が出てこない」
「うっそ！　私ってそんなに存在感ないかな？　思い出してよ、わかるでしょ同じクラスでしょ」
間髪入れずそう言って彼女が泣きそうな顔で俺を見つめた。
同じクラスか。それなら見たことがあるのも当たり前か。でも俺はそいつの存在感どうこうより、人と関わることに興味がないからこの学校に通っている生徒の名前で知っているのは、たまにガセ情報を提供してくる松村と俺につきまとう風太だけだ。だからそんな悲観的になるな、さっきまで笑っていたじゃないか。
俺はくしゃくしゃな顔をした二重まぶたの彼女をもう一度見つめ直す。
「思い出したよ。羽田だろ？　羽田恵那」
「そう！　ナイスフルネーム」
そうだ、こいつはいつも俺を監視している奴だ。
よく飽きもせず毎日俺なんかを見てられるな。やっぱり俺が異星人だとか言っているからだろうか。
「白井くんはここで何してるの？　噂ではＵＦＯを探してるとか宇宙人とのコンタクトを取る方法を考案中とか聞いたけど」
「異星人だ」
「ごめん、そうだね」
羽田は手を合わせて本当に申し訳なさそうに頭を下げた。
別にそこまでされるほど怒っていないけどまあいいか。謝罪に度が過ぎるということは滅多にないことなので少し気持ちがいい。

「噂は正しい、よく調べたな。ところで風太から聞いたけどお前もその活動を手伝ってくれるそうじゃないか」
羽田は一歩前に踏み出し、
「えっ？　いいの、放課後ここに来ても」
とさっきよりも五カラットほど目を輝かせて俺を見つめた。
「好きにすれば良い。騒々しくなければそれで十分だ」
「ありがとう、これで私も一員だね」
何の一員かは少し気になるけど、どうせ生徒同士の噂か何かでそういう物があるのだろう。
雰囲気といい、俺に疑いの目を向けないところといい。少し頭の痛い奴だけど面白い。こいつが普通か普通じゃないか少し試してみるか。
「今日の夜。桂木山でＵＦＯを探す。お前も来るか？」

第2話　二人の山道

どうしよう、おりちゃん。宇宙人の部屋に行って早々、白井くんにクリスマスイブの予定を入れられてしまったよ。

でも山でＵＦＯ探し。

なんて笑いのネタになることをおりちゃんに言えるはずもなく、この問題を一人で解決しなければならない。私は白井くんの約束を即決してすぐさま家に帰り、こんなことを部屋に閉じこもってずっと考えている。

誘われたこと自体それはすごくうれしかったよ。一緒に山に行こうって言われたときは天変地異の前触れかってほど驚いて、思わず大きい声が出たから白井くんに変な眼で見られるほどうれしかった。けど、もしこれが遊園地とかなら無問題だよ、素敵だよ。いつもより大人っぽい服装と化粧して、彼から手をつないでくるかどうかドキドキしながらアトラクションを周るよ。でも私の現実は寒空の中、面白さの一片も感じないＵＦＯ探しをしなければいけない。

なんて愚痴っていてもストレスが溜まるだけだ、ポディティブでいかなきゃ。

約六時間前までは見つめるだけで精一杯だったのにここまで発展したもんね。うん、これはデートと言っても過言ではない。発想の転換だ。山へＵＦＯを探しにいくのではなく、星を、夜景を見に行くって考えればいいんだよ。恵那天才、そしてナイス自画自賛。そうなればうんとおしゃれして化粧もいつもより気合い入れてやっちゃおう。

その為にはあの方の手を借りなければ。

「姉様、お願いがあるのですが」

私は隣の部屋の扉を開けながら、寝転がってテレビを観ている美那に声をかけた。

「いつも通り美那って呼びなさいよ気色悪い。で、何？　その様子

だと物品でもねだりにきたようね」
大正解、さすが生活を共にして、更に血の繋がりもあるだけあるよ。
未成年のくせに煙草をくわえながら話す美那は私の二つ年上の姉で、今年行っても行かなくてもいいようなランクの低い大学に受かり、現在４週間連続サボリ中だ。
中学と高校共に女子校だったから、男遊びが激しくなるかと思っていたけどそうでもなく、学校にもほとんどいかず、家でゴロゴロしている。せっかくのキャンパスライフがもったいない。
「引きこもってるならそのお高そうなコート貸してくれないかな？あとワンピも……ついでにブーツも！」
美那はテレビから目を離さず一気に口から煙を吐き出して、タバコを吸い殻に押しあてて消すと、いやらしい笑みを私に向けた。
「一式じゃない！　ははん、その顔を見る辺りもしかしてデート？イブだしね。次は何オタクなんだい？」
異星人と名乗ってます、何て言えない。もしかすると今まで好きになった人の中でも最高レベルの変人だ。本当のことを言うと正直者が馬鹿を見るのは目に見えてるよ。
「えっＳＦ好きな人だよ。それにデートって言えるほどじゃないよ」
「そのくせ着飾るつもりかよ。まあいいや。恵那がそいつのことを好きで一緒に出かけるならそれはもうデートと言って間違いないでしょ。好きな服持っていきな。そのかわり汚したらクリーニング。破けば修復、もしくは弁償だから」
「わかってるよ、十分承知だから安心して」
私はそう言いながら、洋服棚からハンガーに吊るされている、目当てにしていた白のトレンチコートと、黒いワンピースを取り出した。
白のコートに黒いワンピが合うかどうかは気にしないでいよう、私の場合気に入った物を着るがポリシーだから。あっ、そうだもう一つ忘れてた。

「美那。香水も貸してよ」
美那は私がどの服を持っていくのか確認してから短い溜め息をついて、
「それブリミアのだから本当に気をつけてよね。香水？　好きにしな、でも香水は返せないだろ。まあ、いいや。そのかわりデート上手いこといったらなんかお礼しなよ」
と言って、手の届く範囲に置いてあったタバコに手を付け、くわえ、火をつけた。

夕飯を食べ終わってから、鏡の前で化粧やら一人ファッションショーをしているうちに、あっという間に時間が過ぎて、白井くんとの待ち合わせ時間残り一〇分を切ってしまった。
やばい、ここから待ち合わせ場所のコンビニまで歩いて五分以上かかる、速攻で家を出ないと遅刻決定だよ。
私はカバンに適当な化粧品とハンカチ、ケータイ、財布を入れて急いで家を出た。

時間ギリギリ。小走りしたおかげでなんとか待ち合わせ時間に間に合った。
しかし白井くんの姿が見当たらない。店内を見渡してもどこにもいない。もしかして、私が来るの遅かったから先に行ってしまったとか、それとも……騙されたのかな。
白井くんは、私が白井くんを好きだと知って、好みのタイプじゃないから騙して遊んで楽しもうって魂胆かもしれない。だとすると、どこかから私を監視しているかもしれない。だから探したって見つからないのかな……いや、見つからないならもしかして白井くんは嘘の待ち合わせをしたのかもしれない。そして白井くんは家で私を騙した達成感とこたつのほんのりとした暖かさに包まれているのかも。そんな妄想をすると余計寒くなってきた。
きっとそうでしょ、間違いないよ。やっぱり変な人を好きになる

と、こういうこともあるのか。着飾った自分が馬鹿みたいだよ。てか馬鹿だよ。
なんてしょげた妄想していると、甲高いブレーキ音とコンクリートとタイヤがすれる音が聞こえた。目を向けるとジャージ姿の白井くんが、自転車でドリフトをして私の前で器用に止まった。
「遅れてごめんな。チャリンコの鍵が見当たらんくて」
私は妄想を一瞬で消し去る衝撃的な出来事に眼を丸くした。のは白井くんも同じらしく、
「羽田。お前パーティー気分か！　飯食いになんて行かないぞ」
と言いながら私の頭から足下までくまなく見つめられた。思わず顔が火照ってしまう。
「わかってるよ。ＵＦＯ探しでしょ？　でもそれにおしゃれしちゃいけないって誰が決めたの？」
「異星人である俺が決めた。だから文句は言わせない……って、おい！」
白井くんはさっきよりも更に驚いた表情で、私じゃなくてコートを見つめ、わずか二〇
センチほど近くまで寄って来た。いったいどうしたの？
「お前これブリミアのコートだろ？　高いだろ。それにブーツも。尚更そんな格好では行かせられないな。着替えてこい、家まで乗せて行ってやるから、そのかわり五分以内で着替えろよ」
「白井くんなんでこの服とブーツがブリミアって気付いたの？」
男の人は女の人の服のメーカを知っているものだろうか？　白井くん話しをごまかすように自転車にまたがり、顔を前に向けたまま荷台を指差した。
「異星人だからそういうことも研究してるんだよ。いいから早く乗れ。時間がない」
「時間？」
「お前門限とかあるだろ？　……ないのか？」
白井くんは振り返って不思議そうな目で私を見つめた。

「あるけど日が変わるまでだから余裕じゃない？」
「余裕じゃない。ギリギリだ。いいから早く乗れ」
「もしかしてバスとか乗らないでチャリで行くの？」
もちろんだ、という表情で白井くんは睨み、もう一度自転車の荷台を指差した。仕方なく溜め息まじりで荷台に乗ったその瞬間、白井くんは私の重みを荷台に感じると同時にペダルを思いっきり踏み、勢い良く発進した。
「ちょ、いきなり漕ぎすぎだって！」
私はその勢いで体を後ろに反らされながら慌てて注意したけれど、白井くんは何のその、さらにスピードを上げる。
「ボーッとしてないで右とか左とか言って。羽田の家の場所知らんぞ」
あっ、そうか。私は半分落ちそうになっているお尻を、しっかりと荷台の中央に乗せて、彼の体に触れないように気をつけながら手をめいっぱい前に伸ばし、人差し指で私の住む団地を指した。
「とりあえずまっすぐ、見えるでしょ？　あの団地だよ」
右！　左！　右、あっ間違えた左！　以外の言葉を発しないままアンバランスな服装をした私達は無事、団地に着いた。本当ならこの肉屋のコロッケがおいしいよとか、小学生の頃よくそこの駄菓子屋行ったよ、とかそういう思い出話を白井くんにしてあげたかったのだけど、コンビニから団地までは蛇のように曲がりくねった道で、同じような家が建ち並んだ住宅街にあるものだから、さながら迷路のようになっているので案内しないとすぐにルートからそれてしまう。これほど自分の家の立地条件を恨んだことは初めてだ。
白井くんも自称宇宙人、いや異星人ならＧＰＳとかそういう機能持ってないの？　どれだけ科学音痴な異星人なんだろ。それに五分以内に着替えてこいとか無茶苦茶だよ。
私は白井くんへの愚痴をぶつくさ言いながら、彼に言われた通り、汚れてもいい格好に着替えていた。美那に借りた服はしわが付かないようにハンガーにかけ、タンスの奥にしまってあった中学校のえ

んじ色のださいジャージに着替えて、バーゲンで衝動買いをしてから一度も着ていないコートを羽織って部屋から飛び出した。
「あれ？　恵那。私が貸した服着て行かないの？　てか一回出て行ってまた戻ってきたよね……。もしかしてその服装は。待ち合わせに彼がいなかったから、やけくそランニングでもするわけ？」
「ちがーう！」
一番会いたくない人に出会ってしまった。美那は私がデートに行くことを知っているし、着飾った姿も見ている。上機嫌な私も。きっとクリスマスイブだから遊園地やらそういうところに行って高校生らしい甘い夜を過ごすのだろうと考えているに違いない。
でも実際はこの寒い中、山でＵＦＯ探し。
「ごめん時間ないから！」
私は正面に立つ美那を押しのけ、走って玄関まで行って、スピードを落とさないでスニーカーを履き、扉を素早く開けて閉め、さらに全力疾走で白井くんが待っている自転車置き場に向かった。これで美那もついてこれないだろう。
肩で息をしながら階段を下りていると声が聞こえた。良く耳を澄ませてみると歌声だった。でも風の音かもしれない。そんなことを考えながら自転車置き場を覗くと白井くんが電灯にもたれながら歌っていた。
ほころむ顔。
緩んだ目つき。
澄んだ声。
私は白井くんに見つからないように団地の壁に張り付いて、風の音と間違えるくらい透き通る弱々しい歌声を聴いていた。改めて思った。
約束してよかったと。
……

羽田を待つ間、制限時間の五分を計る為に夏の歌を歌っていた。そう言えばこの歌二年前くらいまではよく歌ってたなあいつと。
少しセンチメンタルになりながらも歌い終えると、羽田がタイミングよく戻ってきた。さてはこいつ俺の歌聞いてたな。
「お、おまたせしました。どう？　この格好なら文句ないでしょ」
何故か頬を赤くした羽田は腰に手を当てて偉そうなポーズで俺を見つめる。
「文句ないよ。それに時間通りだし、じゃ、早く行くぞ」
「そうだね」
俺は勢いよくペダルを踏み、これから約一時間以上二人乗りしないといけないのかと少し憂鬱な気分になった。羽田は見かけ以上に重かった。こんなことを言うと空気が悪くなるので絶対に言えないが、山道を登るとなると重労働になるかもしれない。何の遠慮もなく荷台に乗る羽田に、わずかな可能性をかけて言った。
「お前の自転車は？　二人乗りだと時間がかかる」
「ごっめん。今パンク中なの」
心底申し訳なさそうな顔をして手を合わせて言うのだから咎めることは出来ない。仕方ないか、明日はきっと筋肉痛になるだろうけど、誘った俺が悪い。それに異星人なのに飛べもしない自転車に乗っていることに問題があるのだろう。洋画の出来事のようにふらふらっと飛んでいってくれればいいが、そうなればそうなったで怖い。
「ねーねー。白井くんっていつもどんな音楽聴いてるの？」
「何でそんなこと聞くんだ？　……お前はどんな音楽を聴くんだ？」
俺は答えることが面倒なので羽田に聞き返すことにした。
「えーっと、私はね――」
羽田はうれしそうにラジオやテレビでよく聴こえてくる曲名を口にし、「知ってる？」と問いかけるが、俺は異星人が音楽を知っているとどこか不自然な気がしたので、すべて知らんと言う言葉で返

した。でもそれだと何故洋服のブランドは知ってるの？　と聞かれれば返す言葉が見当たらない。それは嘘をついているからだ、と言う以外は。でも羽田はそんな質問はしないで、流行の芸人の話しやケータイ小説のことを思わず振り返って顔を見たくなるようなくらい上機嫌に話してくれた。
「何だか私ばっかり喋ってるよね？　ごめんねうるさい女で」
「いや、そのまま話してくれていい。ＢＧＭ代わりにちょうどいい」
「そっ、そうかな？　で、でも同じような話題ばかりじゃ退屈だよね……じゃ、白井くんが興味ありそうな話しでもしようかな」
「どんな話しだ？」
　そんな気を使わず自分の話したいことを話せばいいのに。それにしても話しの内容が普通過ぎて全然面白くない。すんなり俺が異星人と言うことを信じたから、異常な奴と思って声をかけたのに期待はずれも外れ過ぎだ。拍子抜けだよ。
「ロズウェル事件って知ってる？」
　こいつは俺を馬鹿にしているのか？　嘘だが俺の設定は異星人だ。知らないはずがないだろうそんな有名な話。自信満々に言うから期待したがやはりこいつは普通の女子高生だ。
「知ってる。１９４７年のロズウェルの牧場に宇宙船が落ちて、それを軍が隠蔽したって話だろ」
「へー、そうなんだ」
　自分から話しを振っておいて、「そうなんだ」はないだろ。こいつもしかしてこの事件を元に作られた外国のドラマを思い出して言ったのかもしれない。事件そのものに興味はなくてもドラマには興味ありか。一気に話す気がなくなってきた。
　でも思い返すと羽田はＵＦＯや異星人を捜したいから旧図書室にいる俺に会いに来たはずだ。でないと生徒から変な噂が流れているあの場所に自分から足を踏み入れようなんて思わないだろう。だとすれば、まだこいつが普通の思考や嗜好を持った女子高生なんていう考えに至るのは早すぎる。もしかすると最近超常現象に興味を持

ち始めたのかもしれない。
俺は出来るだけＵＦＯに詳しくない人でも理解できるようにＵＦＯブームの幕開けとなった事件についてじっくり話した。
いつの間にか夢中になっていて、気付くと目的地に着いていた。一時間以上かかる道のりだからもっと苦痛に感じると思ったけれどそうでもなかった。
「白井くんありがとう、ロズウェル事件ってそんな裏があったんだね。すごい面白かったよ！」
と半ば興奮気味で話す羽田も俺と同じ思いだったのかもしれない。これだけ喜んでくれると頭を使って話した甲斐があったってものだ。
俺は自転車を車の邪魔にならないように道路の端に置いて、軽くストレッチをしてから大きく体を伸ばした。
「よし、ここからが本番だ」
達成確率〇％の探索に俺は気合いを入れた。

……

白井くんは気合いを入れた声を出して、両頬を両手で軽く叩くと、自転車のカゴに入れていたリュックから重そうで黒い警棒のような形をした懐中電灯を取り出した。いかにも遠くを照らすぜ！　と言う感じがしてカッコいい。
白井くんはもう一つ、赤いどこにでも売ってそうな、しょぼい懐中電灯を私に手渡し「よし、この辺りを探すぞ」と言って、ささっと前を歩いていく。私も慌てて追いかける。
「ねえ、ここにＵＦＯが出たの？　そんな噂聞いたことないよ」
山の頂上へと続く道は、木に囲まれて薄暗く、緑の香りも夜になるとどこかに息をひそめ、怪しい感じがして少し怖い。電灯は数十メートルおきにあってほんのたまに車も通るけど、それでも暗い。

「聞いてるの？　……それよりちょっと暗いよね。そのライトつければ？」
「だめだ、一時間しか充電もたないから、ここぞってときに使わないと」
「で、っでも」
「うるさい、もし彼らがいたのに自分たちの声に驚いて逃げてしまったら馬鹿もいいところだろ。だから今から一言も喋るな。これは遊びじゃない」
　彼らっていうのは多分、宇宙、いや異星人のことだろうか。確かに白井くんのいう通りだけど、異星人って私たちを見つけて逃げるような存在なのかな？　逆に捕まっちゃうかもしれないよね、これってなんていうんだっけ？　アブトロニック？　違う、アブタクション？　なんか惜しい気がしてきた……ってイライラする！
「ねえ、白井くん。異星人が私達を見つけたらさらってくかもしれないね」
「そうなったら俺は万事解決だけどな」
　確かにそうだろうね。白井くんは異星人だから『さらう』じゃなくと『送って』もらう、だもんね。でも私はそんなことを聞きたいんじゃなくて。
「それって専門用語みたいなのあったよね、……何て言うの？」
「……アブタクション。ついでにその後、体に何か細工をされたりすることをインプラントと言う」
「あ、ありがと」
　やっぱり異星人的な話しなら耳を貸してくれるみたいだ。顔はよく見えないけどさっきみたいに刺々しい感じがしないから、少しは機嫌よくなったのかな。噂の出所が気になるけどまた機嫌損なわすのも気が引けるし、大人しくついていくことにしよう。
　色気のないジャージ姿で人気のない山道をしばらく歩くと、山沿いに、神社に続く階段が無造作に敷かれていた。絶対こんな不気味な場所歩きたくないな、と思ったのもつかの間。白井くんは何のた

めらいもなくその階段へと足を進めた。
「ちょっ、ちょっと。そこ暗くて危険じゃない？」
私がそう言うと、白井くんは重そうで黒い懐中電灯の明かりを灯すことで答えてくれた。思っていた以上に光は強く、明るくなったけど、まだ心は落ち着かない。
「異星人も怖いけど妖怪とか幽霊が出たらどうするの？　ねえ、ここ出る気がするよ」
私は怖くなってつい、白井くんのジャージの袖を引っ張って呼び止める。
「でねーよ、そんなの羽田みたいなビビリが作り出した幻想とか幻聴だ。それに掴むな、歩きにくい」
そんなこと言われても怖いから仕方ないじゃない、ちょっとくらい気休めの為に掴ませてくれてもいいでしょ。なんて言い返そうと思ったけど、ちらりと覗く白井くんの横顔があまりにも怖いので思わず袖を離してしまった。
もしかして私、山登りしている間に相当嫌われたのかな？　ここに来るまでの道のりは結構普通に接してくれてたのに、今じゃ優しさの一片すらも見え隠れしない。出会って数時間で飽きられた可能性だってあるかも。
こうなったら名誉挽回だ。必死になって、もしかしたらこの世のモノじゃないものが出てくるかもしれない、木の固まりだって見てやる。さっきまでは周りを見るのが怖くて白井くんしか見てなかったけど、そんなことしている場合じゃない。
そう決心して、私は左手に持つ赤い懐中電灯のスイッチを入れて、木々を薄く照らしながら白井くんの後ろをついて歩いた。
神社へと続く、長く暗い階段を、愛する気持ちで恐怖心を中和しながら、ゆっくりと一段ずつ、その気持ちの強さを測るみたいに踏みしめていく。
風で瞬間的に揺れる木の枝、自分が踏む落ち葉の音、山道を走る車のエンジン音、それらが聴こえるたびに驚いて体をびくつかせ、

声が出そうになるけれど、口を抑えて必死にこらえる。これ以上、うるさい女だと思われると白井くんにいっそう嫌われてしまう。

そんな気持ちを押し殺しながら、やっとの思いで神社にたどり着いた。三〇分くらいかかったかもしれないと思って時計を見ると、一〇分くらいしか経っていなくて、その体内時計の誤差に、私はもしかして異世界に迷い込んだかもしれないと、結構本気で怖くなって、体が震えてしまった。寒さのせいだと思いたかった。

第3話　三人目の彼女

階段を上り終え、本堂を眺めようと立ち止まるが、どうもさっきまで感じていた、背後からの気配が消えている。気になって振り返ると、羽田が立ち止まり震えていた。

異常に体を小刻みに震わせている羽田を見て、俺は寒いフリをするなと言いたかったが、顔を見ると青白い。これは演技ではなく、本気で寒がっているのだと判断した。

確かにここは山の中で、標高も少し高いので町中よりずっと寒いだろう。それに羽田の服装は決して厚着とは言えない。そして汗まではかいていないが、山道を歩き、結構段数のある階段を上ってきて少し体が温まっているのに、枯れ葉が飛ぶほどの風が吹いていれば余計に寒く感じるだろう。

「少し休憩するか」

「……う、うん」

どこか元気がない様子だ。ついさっきまでは明るい声で話しかけて、忙しなく懐中電灯で辺りを照らしていたのに。まあ、女は気の変化が激しいというのは短い人生で知った数少ない確証を得た事実なので、俺は気にせず羽田を手招きして、風がなるべく当たらない寺の、本道正面階段の右端に腰を下ろした。

羽田も体を震わせながらやってきて、俺の左斜め前の段差に座り、こちらを見ず、うつむきながら顔の前に手をやって息を吹きかけた。

「ここでも寒いか？」

さっき羽田が震えていた山から寺に続く階段の前に比べると、風もほとんど当たらないのだが、男と違って女は冷え性が多いというから、その影響で俺よりも体感温度で寒く感じるのだろう。

「……い」

はっきりと聴こえないが、きっと寒い、と言ったのだろう。

俺はこの為にと用意したみそ汁を羽田にわけてやる為、リュック

から水筒を取り出し、フタ部分となっているプラスチックのコップに注いで、羽田の目の前に差しだした。
「うわっ、温かい。これなに？　白井くん」
いきなり目の前にそんなものが出てきたからか、羽田はうわずった声を出して、こちらに振り向き尋ねた。
「飲めばわかる」
「――そうかな？　ありがと」
そう言って、うれしそう表情を俺に向けると、一気にコップに入ったみそ汁を飲み干した。おいおい、そんな熱い汁物を勢いよく飲んで大丈夫なのか？
コップを俺に返し、腕で男前に口元を拭いて、プハーと気持ちの良さそうな息を大きく吐いてから、おいしい、とさっきまでの暗い表情を忘れさせるような笑顔を向ける。
「白井くんだけに白みそだなんてシャレてるね」
なんてことを言って機嫌良く笑っているが、俺はその一言に混乱して、慌ててコップにみそ汁をつぎ、舌を火傷しないよう慎重に口へ運ぶ。
「――これは赤みそだ」
「うっそ。私って味音痴なのかな？」
自分では疑っているようだが、間違いなく味音痴だろう。というか、
「白みそは甘いだろ？　それに塩分が高くないからこういう運動的なことをするには赤みその方が適している」
「へー、全然わからなかったし、知らなかったよ。白井くん料理得意なんだね」
「いや、この前調理実習で習っただろ？　だからだよ。俺は家庭科の本を見て料理を作るくらいの腕しかないよ」
こいつは授業中何を聞いていたのだろうか？　しかも味噌の問題はしっかりテストに出ていたはず。普通に馬鹿だな。こいつ。
「本を見て作れるなら上等上等諸行無常って感じだね」

全く意味が分からないが、味噌のこともわからない馬鹿な奴だ。ただ単に語呂がいいので言ってみただけだろう。
「いつも寺内くんはこんないい物飲めてるんだね、羨ましいなっ」
羽田は少し声を明るくして言った。しかし表情が少し硬くなった気がする。
「ん、どういう意味だ？」
「白井くんと寺内くんって、こうやってＵＦＯ探してるんでしょ。その度に白井くんのみそ汁が飲めていいなって」
何故俺がわざわざ探索に出る度、風太の為に何かこしらえなくてはいけない。それに言っておくが、
「これは俺が俺の為に作ってきた物だ。羽田が余りにも寒そうにするからわけてやっただけ。そこまでお人好しじゃない」
言って、リュックの中から家でこしらえてきた塩むすびを取り出し、包んであったラップをめくり、一口かじった。うん、我ながらいい塩加減だ。
「あっ、おいしそう」
「やらん」
「そ、そんなつもりで言ったんじゃないよ。みそ汁もらった上におにぎりもらうなんてそこまで図々しくないよ」
大げさな身振り手振りで否定をするが、その顔がはっきりとおむすびを求めている。けど絶対にやらん。これは俺の晩飯だから、やると深夜に腹を減らして目を覚ますと言う事態に陥る可能性がある。しかし、あの求める目で見つめられながらでは、とてもじゃないが気分よく食えた物じゃない。
どうやってごまかそうかと考え、溜め息まじりで見上げると、
「羽田。塩むすびよりも見るべきものがあるぞ」
「えっ？」
俺はゆっくりと星空を指差す。それにあわせ、羽田も空を見上げる。
「うわー。さすが冬だね。冬って星空が一番きれいに見える季節だ

よね」
　そんな発言を聞き流し、羽田が星空を見入っているうちに、むしゃむしゃというよりは、がつがつと一気に塩むすびを口に放り込み、冷ましてあったみそ汁を飲み込んだ。
「白井くんはどの星から来たの？」
「グァハッ」
「どうしたの？」
　唐突にそんな質問するな、慌てて喉に飯が詰まったじゃないか。
　喉のつまりを治すため強く胸を叩きながら、いちいち考えるのが面倒なので、適当に一番光っている星を指差した。
「北極星かな？」
「知らん。地球人と呼び名が違うからな。羽田は星座とか星を判断するのが得意なのか？」
「いやー、全く。北極星くらいしかわかんないよ」
　そうだろうな、あれはおうし座とか、ぎょしゃ座とか言われても、そうですか、くらいにしかとられない。だいたいもっとわかりやすく星と星とをつないでくれればいいのに少し雑すぎる。やっつけ仕事もいいところだ、あれじゃ名前も形もあったものじゃない。
「白井くんは北極星か……なんとなくわかるよ」
「どういう意味だ？」
　羽田はしてやってもいないのに、してやったりの笑顔でこちらを向いて呟いた。
「冷たい」

　アホアホ、白井のバーカ。どう？　乙女に「冷たい」何て言われた感想は？　最悪の気分でしょ。階段上るとき冷たくした仕返しだよ。白みそのボケを真面目に返すし、それにおにぎりくれないし……三つもあるんなら一つくらいくれたっていいじゃん。それを晩飯かってくらいガツガツ食っちゃってさ。家に帰ればもっといいもの

食えるでしょ？　イライラする。
　でも、あの一言で許してあげよう。みそ汁おいしいし星きれいだから。
　少しの沈黙のあと、白井くんは立ち上がり「冷たいならもうこれで切り上げようか。時間もそろそろだしな」と言ってお尻を叩いて砂埃を落とし、道路へ続く階段に足を進めた。
　なんだ、もう帰るの？　ほとんどＵＦＯなんて探してないじゃない。それに意味を取り違えてるし。虚しすぎる。
　私は白井くんに聞こえないように、ぶつくさ言いながら後ろをついて歩いた。
　階段を下りるときも行きと同じように周りを囲む木を照らしながら歩いたけれど、行きよりも怖くない。慣れなのか白井くんのおかげなのか、深いことは考えず下り、あと数段で終わるってところまで来た。ここまでの時間は一〇分より早く感じたのは、決して下りだからと言うわけではない、と思う。
　すると目の前の草むらが一瞬光った気がした。
「白井くん、あっこ、何か光ったよ」
　私は約四メートル先の、木々の茂った方向へ指を指す。
「そうか？　俺は気付かなかったけど……おい！」
　私は光の射す方へ思い切り腕を、足を振り目指した。
　これは白井くんに好意を生み出すチャンスかもしれない。もし本当にＵＦＯの部品とかそう言うのが落ちていたらきっと私に惚れ薬を与えたように惚れちゃうでしょ。それにもし、何もなくてもがんばってるな、と思われればそれは愛の絆への第一歩かもしれない。
　そしてそんなことより、何より、私は悔しかった。何も出来ないで喋ってばっかりでうるさいと言われ、体が冷え込まないようにみそ汁をわけてもらったり、励まされたり……。
　私が白井くんにやってあげたことは北極星を教えてあげたくらいだ。

羽田は山の中へ飛び込んで行って、すぐに見えなくなった。そしてしばらくすると小さな悲鳴とともに木が大きく揺れて、枯れ葉が舞い散った。

……あいつこけたな。

そりゃそうだろ、あんな暗い中を全力疾走すると、地面に落ちた枝やら何やらに足を引っかけてつまずくに決まっている。

「やれやれ」

ゆっくりと羽田が消えた辺りを懐中電灯で照らしながら、自分はこけないようにと近づく。結構派手にこけたから気絶しているかもしれないな、そうなるとどうやってこいつを自転車に乗せて家まで送っていこうか。無理矢理叩き起こすか？　さすがにそれは気が引けてしまう。……これはかなりの難題だな。

木々をかき分けると、案外近くに羽田がいた。

枯れ葉や土にまみれた地面にうつむせになったまま羽田は動かない。ということは気絶と見て間違いないな。でもこれはひょっとしてネタになるかもしれない。

俺はリュックからインスタントカメラを取り出し、倒れた羽田を一枚取り、それから羽田についた泥を軽く落として、リュックを前に背負い、羽田を背中に背負った。

本当にこいつは余計なことばっかりして、しかもＵＦＯも見つからないし。いや、ＵＦＯが見つからないのはいつものことか。

まあ、だいたい俺が女をこんな夜に山へ連れ出したことも悪いだろう。月曜日、もしも旧図書室に羽田が来ても、キツく言わないようにしよう。というか、こっちが謝るべきかもな。ほとんどの高校生はクリスマスイブを楽しみにしているらしいし。それは過去、俺もそうだったうちの一人だ。

自転車を置いていた場所に着くと、一旦羽田を道に寝かせ、リュックから、何かに使えるかもしれないと勘で持ってきたビニールのひもを取り出し、俺と羽田を背中合わせで何重にも縛り、ゆっくり

と羽田を荷台に載せて、自転車を発進させた。
もしかすると意識のない羽田がバランスを崩し、支えられなくなった俺も一緒に倒れ、車に轢かれるかもしれない。なんて可能性を危惧したが、そんなものは取り越し苦労で、しっかりとキツすぎるくらいひもで縛ったからか、羽田はほとんどバランスを崩すことはなかった。
羽田の団地の前まで着て、時計を見ると十一時四五分。まだ少しだけ門限まで時間がある。結局山から家に戻るまでの道のり、約半時間、羽田は一度も起きることがなかった。
しかしそれはそれで問題だ、もしかすると強く頭を打って危険な状態かもしれない。
そう思うと急に怖くなって、俺は携帯電話をポケットから取り出し、慌てて一一九をダイヤルして耳に押し当てる。
さて、羽田の親にはなんと言い訳すればいいだろう。山道を歩いているといきなり全力疾走してこけてしまい、そこから意識が戻りません。……余りにもかわいそうすぎる、しかしこれは事実だ。仕方ないが羽田には一生の恥を背負ってもらおう。
「うわっ！」
いきなり肩を触れられ驚いてしまい、電話も切ってしまった。
慌てて振り返ると、羽田が俺を見据えている。それはそうだ、羽田しかいない。
電灯に照らされた彼女からは、どこか人間味を感じさせない混沌とした雰囲気がした。
「どうかしたか羽田？　す、す、す少し変だぞ」
不安になって声をかけずにはいられない。
「…そうかな？　なら、まだ慣れていなからかもしれないね」
同じ声質、話し方だけど、どこか違和感がある。でも付き合いの浅い俺にはそれがどこなのか理解は出来ない。
そんなことを考えていると、ガシャ、という網戸と窓を同時に開ける音が聞こえると、女性の声が飛んできた。

「恵那！　やっぱり恵那じゃない。早くしないと門限過ぎるよ！」
羽田のことを下の名前で呼んでいる辺り、おそらく姉妹か誰かだろう。
そいつが羽田から俺の方へ視線を移す。
「あっ、あれが今日のデート相手か……君どっかで見たことない？」
デート？　いやそれは向こうの勘違いとして、どこかで見たことないという問いには俺も同意だ。しかしそんなことよりも今は少し様子のおかしいこいつが問題だ。
「羽田、気は確かか？　確かならここから走って家まで帰れ。門限まであと少しだ」
「…らじゃー。それじゃ安らかに」
安らかに？　お休みってことか。
「お、おやすみ」
やっぱり変じゃないか？　それに普通ラジャーなんて別れ際で言うだろうか。でも俺の言う通り家に向かって歩いているし、問題ない気もする。
俺は幾らかの不安を抱えながらも、羽田とその姉妹に手を振って自転車にまたがった。
出発しようとすると、羽田が忘れ物でもしたのかこちらに走って来た。でも俺はこいつに何も預かっていない、リュックには俺の私物のみだ。
「どうした羽田？」
「…言い忘れたことがあって、確認だよ」
一体何の確認だ？　次の活動はいつ行うのかそう言うことだろうか。
そして俺はその言葉を耳にする。
いつも訊ねられていた言葉、皆が俺をおもしろがる為の確認とでも言おうか、そんな質問を投げかけられた……気がしたが、一文字違いだった。
だがそれはとてつもなく意味深で、どこまでも興味深い。

「白井くんも異星人だよね？」

第４話　不透明な約束

自己嫌悪に塗られた休日。
普段なら土日の為に生きてきた！　ってくらい待ち望んでいるのに、この休日はとてもじゃないけどそんな気分にはなれなかった。おそらくこんなこと、羽田恵那の人生初の出来事だと思う。
その原因となった、クリスマスイブ後のことを、美那はずいぶんと丁寧に教えてくれた。

クリスマスの朝、私は珍しく美那に起こされた。いつもはだらしなく昼くらいまで寝ているくせに、一体何のようだろ？
半分しか開かない目をこすりながら、美那に手を引かれ、リビングに案内、というか誘導された。
「恵那、あんた昨日どこ行ってたの？　ほら、膝擦りむいてたし、木の枝とか葉っぱとかも体についてたよ。……それにあの男」
今起きたばかりなのにそんなに沢山質問しないでよ。
私はイマイチ動きの悪い頭に準備運動をさせる為、美那の問いを無視して簡単な話題を振ることにした。
「ところでお母さんは？」
「そうだね、お母さんいると話し辛いことだよね。安心しな。パートに行って一時まで戻ってこないからあと三時間はある。ゆっくりお姉様に話しなさい」
そんな怪しい笑みを向けられると、話せることでも話す気が無くなってしまうよ。
確かに昨日のことはお母さんには話し辛いことだけど、というか誰にでも話し辛いんだけど。
「あたしが話せって言って話せないわけないよな、恵那。貸してあげた服も着ないでだっさいジャージ着てどっか行くし、帰ってきたと思ったら部屋に直行して寝るし」

そういえば、白井くんに着替えてこいって言われて、家に帰ったとき、美那にあの姿見られたんだった。どうやって説明しようかな。うー、早く起きてよ、私の頭。

「話し辛いよね、ならあたしが言ってあげるよ」

なんだ、美那は昨日私がしたことを知っているのか。……何で知ってるの？

「外でやるなんて、いくらお金がないからってしちゃダメだよ。まあ、あたしも一度や二度は経験あるけど、普通の感覚を持ってる人なら次は嫌って思っちゃうでしょ。あんたはどうなのよ？」

「いやいや、外でしか出来ないでしょ。なーんにも見えないでしょ、それだと」

「へー。マニアックだねー、見かけによらず」

マニアック？　中でやる方がマニアックな気がするけど。けど中でも出来るよね、望遠鏡さえあれば。一点しか見れないけど、寒くないからそれを考えれば中の方がいいかも。でもＵＦＯを探す為の望遠鏡を持ってるなんて、すごいお金持ちの友達がいるね、美那は。私たちはお金がないから、現地まで行かなきゃなんないよ、ちょっと羨ましい。

「まさかだけど美那も経験あったんだ。うんうん、確かに普通の人だと次は嫌だよね」

ＵＦＯ探しなんて興味ある人しか出来ないよ。

「あたしももうしたくないね、いくら男に迫られたって。でも膝擦りむくまでがんばるなんて本当にあんたは見かけによらず、やるときはやる子だね。そんなに盛り上がったなら次もやりたいんじゃないの？」

本当、柄にもなくがんばりすぎたよ。まさか木の枝につまずいて……私その後どうしたっけ？　今、家にいるってことは昨日ちゃんと帰ったってことだよね。でも白井くんと二人乗りして帰った覚えがない。どういうこと？

「美那！　私昨日ちゃんと帰ってきてベッドで寝たよね？」

「どうしたのいきなり？　そうに決まってるじゃない。じゃないとどうやって私が恵那を起こしたのよ？」
「どうして私が山に行ったこと知ってるのよ？　もしかして白井くんに聞いた？」
「まさか山でやってたなんて、確かに見つかんないだろうけど……。で、白井？　あの男の子のこと？　どっかで聞いたことある気がするよ、その名前。……あいつは恵那を送ってすぐ帰ったよ」
マ、マジですか？　ってことは、私はあれから気絶して、白井くんが家まで送ってくれたのか。何て良い人なの。冷たいと思ってたけどそこまでしてくれるなんて。さすが私の好きな人。
って、そんなこと考えてる場合じゃないよ、最悪じゃん私。冷たくされたあげく、最後の最後で勝手に走ってこけて気絶する。
私の恋路は絶望的だよ。恵那、自業自得の極みだよ。
「どうしたの？　落ち込んじゃって」
心配そうな瞳で見つめないでよ、余計落ち込んじゃうじゃない。
「大丈夫、何でもないから」
こういうときは一人にさせて下さい。そして落ち着いたらレンタルショップに行って恋愛モノのＤＶＤでも借りて涙でも流そう。ああ、私はなんてダメな女だろう。
うなだれながら席を立つと、美那がまだ話したりないみたいで、私の腕を掴んだ。
「お姉さんにもっと教えてくれないかな？　昨日のこと」
ニヤニヤ笑って、何がそんなにおかしいのだろう？　こっちは全然楽しくないよ。
「話すことなんてないよ」
「そう？　あたしが初めて野外セック――」
「バッ、バカじゃいなの？　するわけないじゃん！」
私は慌てて美那の口を抑え、さらに声で、その暴言を消す。
「じゃ、山で何してたの？　クリスマスイブに」
「美那には関係ない！」

私は美那から逃げるようにして、部屋に戻り、急いで鍵を閉めた。
違うね。多分、昨日の自分から逃げようとしたんだ、きっと。それを美那に当たるなんて私、最低だよ。
白井くんの電話番号や、家を知っていれば今すぐにでも謝りにいくけど、全く知らないや。寺内くん辺りなら知ってそうだけど、聞くまでして行く気力もない。
十七歳のクリスマス。私は結局、レンタルショップに行くことも、部屋から出ることもなく、ベッドの中で一日を過ごした。眠っても眠っても寝足りなかった。
さすがに日曜日はレンタルショップくらい行ったけど、ほとんど何も食べないで過ごした。食力が湧かないのです。食べたと言えばポテトチップスくらいかな？
そんなこんなで超無気力な休日を過ごしたけ私は、やっぱり元気にはなれなかった。
一番の解決策は白井君に会うことだとわかっているけど、そんな簡単に事が運ぶわけがない。白井くんのことだから、今日も旧図書室にいると思う、会おうと思えば結構簡単。でもあの部屋に行ったってまた白井くんの足手まといになるかもしれない。それにどんな文句を言われるかわかったものじゃない。
そうなればもう私の恋の終末にチェックメイトだよ。
そうだ、もうちょっと心を修復してから白井くんと会うことにしよう、心にもリハビリは大事だよね。会社にだって破局したら休みくれるところだってあるし。
私は布団をかぶり直して、もう一眠りすることにした。

……

言葉を発し続けることで願いが叶う。

俺はそれを聞くたびに常日頃思っていた。そんなことで願い事が叶うなら、毎日だって言ってやる。いや、一時間に一回だって言ってやる。だが、実際はそんなわけがないとわかりきっている。

きっと、その言葉の意味は色々あるだろうが総括すると、それほど言葉には力があると言うことなのだろう、言霊と言うくらいだから。

そして俺はその言霊、言葉の魔力に呪われてしまったらしい。

「白井くんも異星人だよね」

あの言葉が全く離れない。

昼を二回、朝と夜を三回繰り返しても。

きっと俺は罰が当たったのだろう。あのような戯言にもならない戯言を発しているおかげで。

「俺は異星人だ」

まさか、知り合いが異星人なるなんて思ってもいなかった。いや、心から信じてはいない。そんな唐突に人が人でなくなるわけがないのだから。

羽田は人間だ。もう疑いの余地もない。

しかし、あの呪いのような言葉を発した時の雰囲気は、普段通りではなかった。いや、普段の羽田を知らないから、あいつがどうのこうのではなく、あの声、そしてまとわりつくオーラの無機質感は人間には似合わない。どこかそんな気がした。

そして俺はこの休日。考えに考えた結果、二つの答えを導き出した。

一つは、羽田恵那は二重人格者。

今考えると、羽田は異星人がどうとか言うよりは、人間としての俺と関わりを持ちたかったのではないかと思う。探索に行ってわかったが、羽田が異星人に対しそれほど興味を持っているとは中々思えない。なんとなくだが、異星人の話をするよりも、俺自身の話しをした方が、表情が柔らかいように感じた。しかし、探索では俺を異星人だと言うことを意識しすぎてか、思うように関わることが出

来ず、ミスもしてしまい、どこまでも自分が情けなくなった。そこで新たな人格。俺と同等であるだろう、異星人としての別人格を生み出した。とは考えられないだろうか。

二つ目は、あの言葉はただの嘘。

いくら関わろうとしても、中々近づくことが出来ず、あげくの果てにあのミス。そんな自分に腹を立て、ついつい、腹いせに嘘をついてしまった。

あの発言は嘘、という可能性が一番高いだろう。しかし、彼女の尋常ではない雰囲気を考えると、多重人格という可能性も否めない。いや、そんな簡単に多重人格などと言う症状が発症するだろうか？

初めて話す異星人と上手く関係を結ぶことが出来なかったからと言って症状に陥るわけがない。だが、確か、女性は皆、演技をして生きていると言う言葉を聞いたことがある。その言葉を考えると、彼女が発した雰囲気も、女性だからなせる技、日々演技をして生きてきた賜物だとも考えられる。

しかしこれは人の心理の問題だ。他人である俺が、いくら羽田の気持ちを考えたってわかるはずがない。なら実際にもう一度羽田を見て、その言葉を聞くことでしか本当の答えは導き出せないだろう。

ということで俺は月曜日、朝の七時半という普段よりも早い時間に登校している。冬休みで授業もないというのに。そして旧図書室についてから三時間ほど、あのような羽田の心理を考察している。

今気付いたが、羽田はここに来るのだろうか？　俺はあいつに活動に参加してもいいと言ったが、冬休みに活動しているとは言っていない。まあ、来なければ羽田の家を訊ねるまでだ。

それにしても、いつもより早起きしたせいか小腹が空いた。

……至極握り飯が食べたい。

食堂は冬休みだから開いていないはずだ。しかたない、少し時間はかかるがコンビニまで行くとしよう。ついでに昼飯も買うか。

いや、コンビニに行ってはいけない気がする。部屋を出ている間に羽田が来る可能性がある。が、そんなことを危惧していては俺の

空腹中枢が悲鳴を上げるだろう。
解決策として、俺は部屋の鍵を閉めず、俺が来ているという証拠の為にかばんを机の上に置いて教室の扉を開いた。

……

白井が勢いよく扉を開けると思いもしない人物が目の前に立っていた。そのことに驚き、その名前を呼ぶ。
「うっうわ！　……って羽田か」
羽田は白井の顔を二日前の夕食を思い出すように見つめている。
目の前で驚いている人物を白井と確認すると、彼女は数日前の失敗を取り消す為に、訂正の言葉を口にした。
「白井くんは異星人ではないですね」
白井は戸惑った。てっきり羽田は自分のことを異星人だと信じ込んでいると思っていたから。
「お前いつから気付いてた？」
「…人間である羽田恵那は初めから疑っていたよ。でも白井くんの為に信じようとしていたの。でも私はそれを嘘だとしっかり調べなかったから間違っちゃった」
まだ二言三言ほどしか会話をしていないが、白井はほとんどパニックに陥っていた。
『人間である』その言葉で羽田とそれを隔てることに十分すぎる理由だ。
白井はその言葉にすっかり飲み込まれ、約二日考えた異星人発言に対する答えを思い出せず、ただ本能のまま、言葉を口にする。
「お前は誰だ？　容姿は羽田じゃないか」
「…あれ？　言ったよね、異星人だって」
「意味が分からない！　お前馬鹿か？　どう考えたって、どう見た

って人間だろ」
その言葉を聞いて羽田はくすりと笑う。しかしそこには感情はない。
その彼女を白井は睨みつける。目に映るそれが一体何者なのか理解するため、食い入るように。
その行為にヒントを与えるように彼女は口を開く。
「羽田は山の中で気を失ったでしょ？　それは私がこの体を少しレンタルするためよ」
大きく息を吸い、呼吸を整え、白井は一度落ち着こうと目を閉じた。そしてゆっくりと彼女の言葉を思い出す。

『体を拝借する』ということは考える力、つまり脳は存在して体は存在しないと言うことだよな。
今の羽田は、全く自分のことを羽田だと思っていない。ということはやはりこれは多重人格なのだろう。
もしかすると山の中へ突っ走ってこけた拍子に、新たな人格が生まれたのかもしれない。かなり非科学的だけど、心理なんてものは科学が介入できない分野なのだからこういう突拍子もないパターンも存在するだろう。かなり自分の都合に合わせた考え方だけど、これしか答えが見つからない。というかそう考えないと混乱してこいつと会話ができなくなってしまう。なら羽田の話しを合わせるしかないだろう、元に戻るまでは。
それにこうなった原因は俺にもある。なら、元に戻る為の方法を導かなければならない。
今のところＵＦＯやＵＭＡを発見するほどの難易度だが。

全く白井の目を離さない羽田に対し、白井はその言葉を、形は違えど信じることにした。異星人であろうと二重人格であろうと、彼女が羽田恵那としての性質を持たないことには変わりはないから。
「じゃあ、質問だ。お前が異星人ならどうやって羽田を操っている

？」
「…うーんと、何て言えばいいかな？　ちょっと待ってね。言葉を探すから」
そう言って親指の爪を噛みながら瞳を閉じる。
静かな旧図書室に秒針の音が二度鳴ると、彼女は口を開いた。
「マイクロチップみたいな物かな、この国の言葉で言うと。実際には機械じゃなくて細胞だけど。人の思考を奪い、一時的に自分の物にするの。でも記憶までは奪わないよ。それ奪っちゃうと不便でしょ？　言葉も話せないしコミュニケーションの取り方もわからなくなっちゃうから。だから記憶は羽田恵那で思考が私なの」
白井はその言葉を頭に入れたが、理解することはできなかった。あまりにも非現実のオンパレードだからだ。それでも動揺しないように話を合わせる。
「そうなのか。……じゃあ少し疑問だけど、いいか？」
「…いいよ。お好きにどうぞ」
「一時的に自分の物に出来ると言ったけど、その一時的ってのはどれくらいだ？」
その問いの後に、再び沈黙する。たった数秒、たかが五秒未満。しかし、それは白井にとって何十、何百倍も遅く感じた。雲の流れを眺めるほどに。
「一日に一時間くらいかな？」
その時間が思っていたよりも短かったのか、白井は胸を撫で下ろした。
正直白井はこの羽田、いわゆる別人格の彼女のことを快く思えていない。彼女は、表情を変えはするが、全く感情と言うものが伝わってこない。しかし愛想笑いとも言えない、それはまるで微笑んだ人形に似ている。彼女は笑うフリをしている。そこに不快感が募るのだ。
「ありがと。あと一つ、これが最後だ」
息をのみ、その言葉を言い間違いないようにゆっくりと口にする。

白井が最も訊きたかったこと。
「人間の記憶と体を乗っ取って、異星人のお前は何がしたい？」
そしてまた、沈黙を置く。どうやら彼女は会話を交わす為に少し時間を置かなければならないと白井は気付いた。その数秒で、母国語を日本語に変換しているのだろうと。そう理解するにしても、このわずかな沈黙は白井にとってはとてつもなく苦痛だ。思わず眉をひそめる。
「感情を知りたいの。私たちにはほとんどないから。その為にわずかな時間だけど、感情を持つ人間とふれあいたいのよ」
少しうつろな表情を見せる彼女から、白井は初めて感情を読み取った、そして白井はその表情を見て思った。これが彼女から二重人格者を消す方法なのだと。
もしも、彼女が『感情』と言うものを知ることが出来れば目的は達成されるだろう。それにより、彼女は星に帰る、すなわち二重人格者の消失になるだろうと推測した。
「わかった、俺がお前に感情を教えてやる。そのかわりわかったらさっさと星に帰れよ、地球は地球生命体の物で地球外生命体の物じゃないからな」
羽田を二重人格者にしてしまったという罪悪感から、白井はその言葉を口にした。
「…ええ、白井くんの言う通りにするわ」
彼女は微笑む。その笑顔の半分に満たない感情しか感じ取れないが。
思ったより上手く事は進んだが、その先を白井は考えていなかった。何かヒントでも得られないかと考え財布を開き、お札を取り出す。すると、その隙間からひらひらと舞いながらチケットが一枚床に落ちた。
白井は足下のチケットを拾い上げ、それが何のチケットなのか確認する。
そのチケットには『海洋館５００円引』と書かれていた。

それは先週、白井がバイト先の店長に残業手当の代わりにもらった水族館の割引券だ。裏面を見て四名様まで有効と書かれていることを確認して、彼女の目の前に差しだした。
「小手調べとしてここにいこうか」
「えっ、海洋館？　うれしい、行く行く！　今すぐにでも行きたい！」
白井の目に映るのは、無感情で微笑む羽田ではなく、溢れ出すほどの幸福感をまき散らす笑顔の羽田だった。つまり、タイムリミット。

第5話　雪を待つ間

「海洋館？　白井と？　あんたマジで言ってんの、何度も言うけど。てか何度でも言ってやる」
電波に乗せて私を責め立てるご立腹な声が聞こえる。……もう切っていいかな？
電話の相手は友達でクラスメイトのおりちゃん。冬休み中だと言うのに、朝の七時半からクリスマスイブはどこにも行かなかったからどこかに行こう、って内容の電話をかけて来た。今日は二八日だからイブから四日経っているのに、それを遊ぶ口実にする不自然さ、そして自分から電話をかけておいて怒鳴り散らす機嫌の悪さ、そして朝早くからの着信。ということは、
「また彼氏とケンカしたでしょ？」
「……悪い？　だからなぐさめてよー」
当たったけど全然うれしくないや。多分、彼氏と一緒に夜を明かして、早朝の別れ際でケンカになったんだろうな。
おりちゃんにとってはこういうことは珍しいことじゃない。確か半年くらい前も丑三つ時に電話がかかって来て、ビビりながら携帯を握ったことを覚えてる。
まあ、今回もいつもと同じ、ケンカという名のじゃれ合いでしょ。すぐ仲直りするのは目に見えてる。
「おりちゃんのストレス発散剤じゃないの、私は。普通の人と遊ぶ約束ならおりちゃんの為に断るけど、今日はターニングポイントなの」
「ターニングポイント？」
「恋の」
そう言うと、落胆を感じさせる深い溜め息が聞こえてきた。人が決意を込めた言葉に溜め息を吹きかけるなんて、なんて不届き者だろう。溜め息の後の言葉も長い付き合いだから大体わかる。どうせ

「幼いわね」とかそう言うことでしょ。
「恵那はいいわね、ちゃんと好きだから、それで恋してる……」
あれ？　いつもと違うこと言うね。それにちょっと悟りって感じがする。にしても言ってる意味がわからないよ。
「おりちゃんだって恋してるじゃん。好きなんでしょ彼のこと」
「好き……さあ？」
さあ？　って、好きだから付き合ってるんでしょ？　だからケンカするんでしょ？　わけわからないことばかり言って。
さてはこうやって私を混乱させて白井くんへの興味を逸らそうとしてるのかも、きっとそうだよ。そうとわかれば情が移る前に切るのが良策。
「ごめんおりちゃん。話し聞いてあげたいけど、もうそろそろ行かなきゃダメなの」
「ちょっと早くない？　まだ八時過ぎでしょ」
「まだパジャマなの。今からシャワー浴びて化粧とかいろいろしなきゃだから、ごめんね！」
「ちょっ――」
呼び止めようとするおりちゃんの声を、途中でバッサリと切る。すぐに鳴る着信音を無視して私は出発の準備を進めることにした。確か九時半に海塚駅だから何のトラブルもなく、普通に準備できれば間に合う時間だ。自分で決めたタイムスケジュール通り行動が進むとすごく気持ちよくって、充実感がある。時間ってすごい。
そんなことを考えながら、シャワーで濡らした髪を、洗面所でドライヤーを使って乾かしていると、珍しい姿が鏡に映った。それもこっちに伝染するくらいの眠気眼で。
「美那。今日は早いね、おはよ。この前借りた服また借りるね」
日曜日以来の早起きだ。あのときは私に用があったからだったけど、今日も何かあるのかな？
「それはいいけど、あんた二日間引きこもったと思ったらいきなり学校行って、そいで帰って来たらいつも通りって。……それにその

上機嫌な顔。またデート？」
「また、って失礼だよ。妹の恋路をもっと喜びなさい」
「相手は白井って子だっけ？　で、どこ行くの」
美那は興味のなさそうな声で訊いてくる。でも目は興味津々。本当にかわいくない姉だ。
「海洋館だよ、白井くんが割引券くれたの。すごいでしょ？」
私から誘ったんじゃなくて、向こうから誘って来てくれたんだよ。舗装されたような恋路をスイスイ思ったスピードで行けると、そりゃ顔も緩むでしょ。
「狙いは恵那じゃない、きっとあたしだよ」
「何言ってんの？　なんで美那が」
美那はたまに何食わぬ顔で突拍子もないことを言う。今のはさすがに妹でもちょっとビックリだよ。
「そんな顔しなくても。冗談だよ、冗談。にしても……海洋館か、ならあたしらと会うかもね」
「美那が外出？　ありえない、冬だよ冬」
それは天変地異の前触れか、ってほどありえない。
二年くらい前から美那は、一二月と一月は引きこもる性質を持っている。よくわからないけど突然そうなった。お母さんもお父さんも学校に行きなさい、と注意もしないのから、何か複雑な事情があるのかもしれないと思ったけど、きっとないだろうなと私は思う。というか祈っている。冬の布団は気持ちいいから、という理由ならいいなと。
そんな美那が外出すると言うから驚きだ。
「ちょっと引きこもりにも飽きたからね、大学の友達と行くんだよ」
「マジなんだ、冗談と思ったけど。で、何時くらいに行くの？」
「向こうには十一時くらいに着くかな？　……だめだ、やっぱ眠い。ギリギリまで寝よう」
美那はあくびまじりで言いながら寝癖頭をかいて、ゆっくりと自分の部屋に戻って行った。

そりゃいつも朝夜逆転生活しているから眠たいだろうね。このまま待ち合わせ時間まで眠ってしまって、約束破るかもしれないな。美那は一度寝ると結構深い眠りにつくから。心配だからあと一時間後くらいしたら電話かけてあげようっと、だらしのない姉の為に。

約二年ぶりに冬に外出するから特別な約束かもしれない。これを機に美那の冬限定引きこもりも治ってほしいけど。

ヘアアイロンの電源を入れて、髪を巻くよりも先に朝食をとることにした。美那のことばっかり考えている今の状態だと、髪のセットが上手にできないと思う。元からそんなに上手くないのに、そこからマイナスになると髪を巻くだけ無駄になってしまう。ご飯食べて気分転換しなきゃ。

昨日お母さんがパート先からもらってきた菓子パンと牛乳を味わいつつ、何を着ていくか、それと持ち物も考えて、時間短縮。イブみたいにギリギリの到着は嫌だからそうしないと不安が募る。掛け時計を見ると八時半、思っていたいより時間が進んでる。あと四五分後には家を出ないと間に合わない。少し支度のペースを早くしないと。

手の甲くらいのサイズまで食べていた菓子パンを口に押し込み、私は部屋に戻って着替えることにした。

そして出発の準備が終わったのは九時一五分。余裕で間に合う時間だ。

靴を履き、イアホンを耳につけて、久しぶりに思った通り緩く巻けた髪を撫で、その出来を確認しながら扉を開けた。

いつも通りの寒空には、ふわりと結晶が舞っていた。陽の光に反射してきらめき思わず目を奪われる。空中で姿を保つその結晶は、地に落ちるとそれまでの輝きを忘れさせるように瞬間で溶ける。

「雪だ」

この地域じゃ一二月に雪が降ることは珍しいから少し驚いた。美那が外出するとか言うからこんなことになるのかも。

見とれてる場合じゃないと気付くまでに数秒かかって、慌てて玄

関に立て掛けているビニール傘を適当に取り、私は緩く巻いた髪がボサボサに崩れないことを祈りながら、雪が降る駅までの道のりを歩いた。思ったよりも寒くない。

……

駅までの道のりを自転車に乗って進んでいると、冷たい感覚が頬に伝わった。

「雪だ」

これには少し驚いた。天気予報を家から出る前に見たが、降雪なんて言葉を一言も聞いていない。それにこの街で一二月に雪が降るなんて何年ぶりだろう。

と、そこまで考えて、過去を思い返すことをやめた。つもりで思い返してしまう。

何年ぶり？　考えなくてもいつも頭の中にその答えはあるじゃないか。

時間の流れのように忘れようとしても忘れさせてくれない、因果。それは俺が生涯抱き続けなければならない、唯一無二の事情だろう。そうすることで、俺は自分の罪の大きさを理解しようとしている。けれど、きっとあいつはそんなことをしている俺を、冷たい目で見つめこんなことを思っているかもしれない。

あれは優に引き金を引かれたわけじゃなくて自分自身で引いたの、だから優は悪くない、と。

俺はその言葉で罪の意識を中和して、心臓の高鳴りを抑える。

でもそんな思いは所詮、俺の妄想。実際にあいつの口から聞いたわけじゃない。その真実を知りたいが、今となっては知るすべもない。

だってあいつは、明里は死んだのだから。

二年前の一月、寒い雪の日に。
落ちる雪は、すぐにコンクリートと解け合い美しい結晶としての姿を無くす。それを見て、明里への思いもこの積もらない雪のように溶けてくれればと、ありふれた詩のようなことを思ってしまう。
本当にオリジナリティもセンスのかけらもない詩だ。
また冷たい感覚が頬を伝う。右手でそれを触れると雪ではないと気付く。
涙というものが、意識しなくても自然に出るということをこのとき初めて知った。

待ち合わせ場所である駅のホームに着くと、先に羽田は到着していたようで、ベンチに座っていた。耳には白いイヤホンが付けられている。
俺は羽田の元に寄り、声をかけようと思ったがためらった。あまりにも無表情だからだ。その顔は、テストの為に興味のない数式を覚えようとしているクラスメイトと似ている。
音楽を聴いているのにその表情は間違っている気がする。好きでないのならそのイアホンを取ればいいのだから、音楽など聞かなければいいのだから。
ということは、もしかして自称異星人の多重人格面が表に出ているのかもしれない。
俺は決心して声を発した。
「待たせたな、一体何を聞いてるんだ？」
……。
どれだけ音量が大きいのだろう？　普通の声で話しているのに、どうやら羽田の耳には届いていないようだ。仕方ないので羽田の左隣に座り、イヤホンを取ってやった。
「あっ、白井くん。おはよっ」
やっと気付いたか。その表情を見る限り、色があるので、羽田恵那本人に間違いはないだろう。二重人格の方は感情が薄いというこ

とになっているから。しかし、いつも表情をコロコロと変える羽田が、あんな無表情を持っているとは少々驚きだ。
「何を聞いてるんだ？」
「えっ、コレ？」
羽田は聴く？　とうれしそうな顔で訊ね、左耳に付けていたイヤホンを俺の右耳にそっと付けた。
流れる音楽は愛だの好きだの切ないだの、そういう類の言葉で尽くされた、新鮮味のない大衆音楽だった。音楽は芸術と世間ではくくられているが、この右耳に伝う音楽は果たして芸術と言えるのだろうかと首を傾げたくなる。来る途中に雪を見て思いついた俺の詩と大差がないような気さえする。
「これ何て言う曲だ？」
問う俺に、羽田はありえないと小さく呟き、目を大きく開げた。
「これオリコン三週連続トップ３入りの曲だよ？　知んないの？」
そうか、なるほど。だから感動できなかったのか。
ありふれた歌詞、どこかで聞いたことのあるような曲調。それらは簡単に音楽を売ることの出来る一つの方法だろう。浅く広く人の感動を誘う音楽。オリジナリティの微塵も感じ取れないコレを、俺は音楽と呼べても芸術とは到底呼べない。
イヤホンを外し、羽田の膝元に軽く放った。
「ありがと。あんまよくないな、この歌」
不思議そうな顔をして羽田は俺に訊ねる。
「そうかな？　売れてるよコレ？」
「売れている曲が良いなんて安直な考えはよせ。それにこの音楽を聴いているお前の顔は、とてもじゃないけど良い音楽を聴いている顔ではないように思えたけどな」
羽田は俺のつまらない音楽論を聞くと、俺から視線を外し、切なげにうつむいた。
「そんな顔してた？」
そして作り笑いだと即座にわかる下手な笑顔を俺に向ける。

もしかすると、羽田は本当にこの音楽が好きだと思っていたのに、実際はその逆であることを俺に指摘されて初めて気付き、気を落としたのかもしれない。
しかし俺は嘘を言っていない。
「無理しているように思えた。罰を償う方法として、イヤホンを付けているように思えた」
その姿は少し俺に似ていると思ってしまった。
明里の死を背負い続ける俺と。
「それは正解かもね、案外鋭いじゃない白井くん」
明るい声で言いながら、うつむいた顔を上げるその表情に、羽田恵那はいなかった。
「お前は……」
顔をうつむき、上げる。その数秒の間に、羽田の面影は消えていた。
実際、目の前で変わられたのは初めてだから、思わず声が詰まる。その何気ない変化に秘める異常性を感じ取れずにはいられない。
「…私は羽田恵那じゃないよ。わかってる？　そこんとこ」
「わかってるよ。そんな異様な雰囲気を持つ人間なんているか」
本当にこいつのことを異星人じゃないかと思ってしまうほど、人とは別の印象を与える。それくらい異質であり、無感情に包まれている。
今日で出会うのが二度目だが、まだ恐怖心をぬぐい去っていない。
いや、来るまでは、実は言うと楽しみにしていたほどだ。二重人格者など、生きているうちにお目にかかれるかどうか微妙な確率だから、この機会に観察しようと思い、その好奇心で水族館に誘ったのだから。
しかし目の前に彼女の存在をとらえると、そんな感情は深海へ潜るように暗く消えていく。
そんな思いに耽っている俺の服の袖を、恐怖の対象者がくいっと引っ張る。

「なんだよ、一体」
「…電車だよ」
彼女の指差す方向には快速列車が止まっていた。
電車が来た音に気付かないほど物事を考えるなんて俺もどうかしてるな。
ゆっくりとベンチから立ち上がり、彼女の後に続いて電車に乗った。
扉は、空気の抜けるような音を機械音に変えたように鳴らし閉まる。
平日の九時半という中途半端な時間なので車内は人が少なく、座席をちらと見るだけで、空いていることを確認できた。
抜け目がないと言うのかどうなのか。彼女は俺より先に座席を確保し、その隣へと手招きをする。電車で空いている席があれば座るというのは羽田の知識なのだろうが、俺は生憎電車では立ったままでいる方が好きだ。けれど、二重人格面の彼女に反抗すると何をされるかわからないと言う恐怖心があるので、俺は大人しく彼女の隣に座る。
……。
手招きした割に何も話さず、じっと窓から景色を眺める彼女に、俺はしびれを切らして声をかける。
「今日どこに行くかお前は知ってるのか？」
昨日の旧図書室では伝える前に羽田恵那に戻ってしまったからな。
「…知ってるよ。海洋館でしょ、魚の動物園でしょ」
言葉に大きな間違いがあるけど、何となく意味が分かるところが悔しい。
「それは羽田の記憶から引用したのか？」
「…そうだよ、引用して私なりに答えを導いたの」
「惜しいが間違いだ。動物園は動物がいるところであって魚がいるところではない。でもニュアンスは合ってる」
「…じゃあ合ってるじゃん」

……こいつ反抗する気か？　かわいくない奴だ。歯向かわずそうですね、と言っておけば良いものを。
「合ってないから言ってるんだよ馬鹿。俺はこの星の、この国の住人だ。だから間違えるはずがない」
「…じゃあ、何でいつも嘘ばかりつくの？　嘘だらけのあなたの言葉を信用できない」
　彼女は残念と、呟くように言う。
「お前感情ないんだろ？　じゃあ、俺が嘘ついてることなんてわかんないだろ、それも羽田の知識か？」
　俺は思わず声を荒げる。唐突に発した彼女の言葉が鋭く胸に刺さり、驚いてしまった。
「…違うよ。私たちの星の人はほとんど無感情なの。感情なんて、ほんのほーんのちょびっとしか持ってないの。だから私たちにはそのちょびっとの感情を読み取ることが当たり前だった。だから、あなた達のような感情豊かな生物が、隠す感情くらい簡単に読み取れるよ。それが喜怒哀楽のどれかはわからないけど」
「じゃあ、何で俺のことを異星人と間違った？」
「…あのときはまだそれを『嘘』と言うものだと理解していなかったからわからなかったのよ。先入観もあったかも。それにそんな原始的な感情を、あなた達のような高度な感情を持った生物が持っていると思わなかったの。浅はかだったよ」
　と言ってはにかんで見せたが、そこはそんな表情をするところではない。
　こいつの言ってることはあまり感情がこもっていないのでイマイチ真相がつかめない。まるで活字を読んでいる気分になってしまう。でも俺が嘘ばかりついていることについては間違いではない。
「ついでに言っておくと、この羽田恵那も大嘘つきだよ、白井くんレベルの嘘つきかも」
「羽田が嘘つき？　どういう意味だ。あいつはいつもボケーッとしてボケーッと話してるだけじゃないか」

「…だね。でも羽田の頭の中を見れる私が間違ったことを話すと思う？」
残念ながら思わない。そしてそんな嘘をつくメリットもないしな。でも何故こいつはそんなことを言ったのだろう？　そこだけが気がかりだ。
「せめて私には嘘つかないでね。他の人には良いけど」
「考えとく」
いきなりそんなこと言われたって理由も聞かされていないのに承諾するわけにはいかない。こちらにだって嘘をついて過ごして来た意味があるのだから。
……でもこいつは羽田の二重人格という存在だ。そう思うと別にそこまで意固地になって嘘をつく必要はないのではないかと思えてくる。
「…水族館に着くまでに答えを出してね。じゃあ」
「ちょっと待てよ！」
俺はまだ聞きたいことが沢山あるのに、そんな自分勝手に羽田恵那に戻るなよ。
と思っても遅かった。
そこには顔をきょとんとさせ、俺を見つめる羽田恵那が座っていた。
「何を待つの？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5307e/

異星人な彼と彼女

2010年10月23日01時42分発行